

## 糞分析によるヤマネ *Glirulus japonicus* の食性

落合菜知香（筑波大・生物資源）、門脇正史（筑波大・農技セ）

玉木恵理香（筑波大・生命環境）、杉山昌典（筑波大・農技セ）

ニホンヤマネ *Glirulus japonicus*（以下、ヤマネ）は、齧歯目ヤマネ科に分類される小型哺乳類である。一属一種の日本固有種で、国の天然記念物、準絶滅危惧種（NT）に指定されている。冬眠中は採食を断ち、排泄もほとんどしない脂肪蓄積型の冬眠動物であることが知られている。そのため、活動期における採餌は、ヤマネにとって非常に重要であると考えられる。しかしながら、ヤマネは小型で夜行性であるためその生態調査は難しい。特に食性について野外で定量的に観察した例は少なく、ヤマネの季節的食性は十分判明していない。そこで本研究では、糞分析を用いてヤマネの活動期の食性の季節変化を明らかにすることを目的とした。

本調査は長野県にある筑波大学農林技術センター川上演習林で行った。演習林内の林道・歩道沿いに設置された塩ビ管巣箱（164個）によって個体を捕獲し、個体がいなくても糞が残っている場合は糞を回収した。採集した糞は全てポリ袋に入れて冷凍保存し、後日分析した。巣箱調査は2011年5月31日から10月12日まで、約10日間隔になるように計16回行った。糞分析では60%エタノールに糞サンプルを浸して十分に解し、シャーレ上に均一に広がるようにした。10×10の格子法にて、方眼の交点100ポイントに出現する内容を實體顕微鏡下で分類した。分類項目は、動物質、植物質、幼虫、花粉、種子、不明とした。季節的变化を検証するために、分類したそれぞれの項目について月ごとの出現ポイント数を比較した。

糞分析では、節足動物の脚・口器・翅、甲虫の外殻などを動物質、果皮などを植物質に分けた。また、幼虫は皮部分が残っていて識別しやすかったため「動物質」とは別項目にした。糞からは全ての期間で動物質、植物質、幼虫が出現した。限定的に出現したのは、5月から7月下旬までの花粉、8月から10月までの種子である。また、5月にのみマツ属とされる特徴的な花粉が出現しており、冬眠からの覚醒直後にはマツの雄花を採食していると考えられる。動物質の量は6、7月にかけて増加しており、昆虫の発生量と関係していると考えられる。幼虫は今回の調査期間中の糞からはどの季節も一定量以上出現した。また、保管中のヤマネにガの幼虫を数種与えたところ、ほとんど残さずに採食したことから、幼虫類はヤマネの餌資源の中でも重要な要素になっていると考えられる。